享保以来年 全

津田文庫
文庫 1
1617

享保十四己酉四月、禁庭に直象御覧之時

御詠

院御製

しられぬ象をはかめ比よしゆきと
みんまてやはまてせとかしらめしに

百年に一とせしてたくみても
おもりふみまれなる象乃ゆめそ

中院内大臣通躬

早稲田大学図書
つだ文庫
010190597852
1617

昔れも今もめてたまきぬ寿はあめつちの
あひみあひみるしるしとそなれ
めてたしく今もさかりもしぬよき
いまふきめしれ寿とやちえぬ

西三条大納言公福

今日ふるはまもひとのふる霞をしと
君しそえてめしの世試かさねて
むかしさへまれなる寿のしはよと

いくちひろさまつちてへん
悠久にうらとおもひし寿と今
よにとほ君かゝの世とも千々の世

烏丸大納言光栄

月かげのかすかにとあまの川
音みゆるはゆりぬ浪ともおくらん
う陶ふ世のめくくとするあまの川
おもかへく寿れ民名草探と

武者小路大納言實陰

ありとてもむかしは君か代に
老となりけむ事をなんそめり
けしあれハ月海さしをさきの號に
ぬりぬる事もかくてそしは

冷泉中納言爲久

年ひさし世の恵に人おふるを
今もそへよとおもふ事かも

なりはひのあまきをたかもる民草よ
いとしめらさ乃はめそらりは

武者小路公野

君か代にまかせて人の世とは問う
松よりはつかやうすらん
かしこくて今春秋も志らや人の世乃
なりはひのふてふ事をかめらさ哉

御製

我世をはいかふとこそてり寿との
いつまさと雲居枝ふんゆらん

御詠

四民常にかはらぬわざをまもりけり
年乃神の恵ふれ世界ちさき
御へたる民の心ともしらは
ゆめとしうましき春政乃元

書はしをみしましるうき春乃うれ
山ともすゝ流夜花に香り
風舞さいちゃとる雛ハ引うつて
世界にりうすき人の世乃神も
乃雛　春風春水一時来
ゝ雛みれハ君うれ歩春風に
ふけく春るゝふ花乃下に

政中留

以乃毒のむしはえしうとと
外よ之けり春雨流露
麻柳し柳とかた山人帰ねとと
かるしを白く蓬乃梅かる

御詠　貞道公

七夕月

小萩之事打ちみけしら月影ふ

むまりほのめく星合乃空

七夕夢

七夕流んやえてまつるらん
渉湖とまよふ河さの川夢

名所七夕

麻しふれ清か様みて色弁小明石浮
流としるし川舟況星合乃空

七夕康

七夕にかふ乃あ世はふにおもひやく
浦らしくも康たるなり

七夕祝

萬あくる年越しそけれ七夕乃
まちむかひてふ河きし浦川に

織女惜別

織女乃まつ乃君心残りくて
きしこうら浦辺ゝ別れ乃言

夜深

夜更は夜半法寝覚に枕さくて
あま乃川星や遅出ぬらん

元日　悠哉先生

きのふのことをわすれ春毎に
けふの心はかはらさりけり

甲春

とめか絶谷の戸ほそに鳥乃夜声
ねられてや来鳴うらむ

春来鶯遅

梅か香にそのめく春を告るかな
たゝし告かへぬ鶯乃こゑ

鶯当梅といふ心を

咲梅の色をかうしぬあるしとや
春来ゝとしに中にも鶯

雪中若菜

雪深きつもる袖をしかしこれ
春の日今日をつみかね若菜も

松上霞

浦風もなれさよの雲をとゝめすまは
しき松のかかる今すむゆくらん

春霞

山の端からもかく月をかゝるらむ

かすみとはいろ志のしめれ庭

春山

咲さうすむすりもまつ霞立
やまかや春の立ハ見ゆらん

春恋

人ましむ時そいつしめ春は桜
若しこき日乃のまつりかり

賞有慶喜

よ縁しの春にゆるすしんれいと竹の
よゝ城かさのとくうくいすの音く

神春風

静かれ人の立かへりさゆれとも
式ちふよふかり我春の神風

夏雨也

らふ雨ちいさりふしそ也の如すれ
さうれも消つぬみしのくふ

春植物

年々に春咲花とおもへとも
ほかにしめくゝりぬ春かな
春正家

淋しさは春も霞に埋れて
いりしも人のこえぬ山里
風静花苗

春風も枝とゝめさす吉野山
さかりまてつく花の白妙
月夜春、

おほろ夜の月はいとゝ霞かし
むかしなりしの新乃梅かえ
梅花

りかめてしらさる梅のあるしかな
花ひらけすもまたしけり
笑酒霞

霞の戸ハ鶯の声様に明けりと
霞ハ風ふくゆふさりの山

柳寄

朝ましきこゑにけふらる青柳の
みとりまゆにをけりきし露

立春日といふ事を

天の戸をおし明ぬるかな山の日も
こよひより去年に春もこえしん

梅花告春ト

梅しより時ならくに咲なるの
春とさしてきたり庭の梅かゝ

欵冬

ちるよしのさとは忘れと云の葉よ
いふよりさまさし山吹の花

見花

世のうきも忘れかりけるなかき日に

あのおさしは花とみゆらく

松坂の主か庭の梅なりとて

白と紅なり花をとりて作りけり

返すかふ

よろつの情も深き梅なるを

いつにも色にもめてし詠めむ

春眺望

筑紫しき庭しけれど景もなく

武蔵霞める春の海原

山里の賤か家の軒に花咲

けると見へ侍りて

咲よりも志る山かつの里まても

花を都とみしき返らふ

享保九年九月廿八日於嘉遊院文
為諸和尚六百年　季和敬

たゞあはくうき世の民に
おほふかなわがたつ杣にすゝ
ぞめの袖と云文字をかし
らに置く

神眷西殿

たりきくと春日川松ある野殿
あしけき神や世にあらはれん

二条右府吉忠公

夕鶯

ふのゝ山あをばがくれに夕鶯の
やまざくら散れどもけふのぬ鶯

梶井文道に法親王

柳帯霞

今朝はまたかすみ垣根の柳風
みだれぬ糸もなびく白露

久我大納言雅通卿

春月

中々に成ても霞かくもくと
けふのほとりすむまされよの月

武者小路前大納言実陰卿

残花

雪とみる桜や花と山おろし
をのこ人かりをへつまもり

藤谷中納言為香卿

水上花

うつろひし桜ハさらに散ぬれと
あれとゞうつくしき色ぬ中なる

久世前宰相通夏卿

暮春

暮ぬれは別にしそ春惜き
立とふかり似たる春のはなの浪

中務卿邦永親王

卯花

とふ月にあきとしてみ迷ふかな
里乃かきねにさける卯の花

日野大納言光栄卿

郭公

清滝の浪とふ山乃ほとゝきす
なれともや出し声にすく

一条内府兼香卿

早苗

民ならぬさへしはしにかへりみて
うゑいそく小田乃早苗

飛鳥井中納言雅香卿

瞿麦

みるまゝにけさこそ露とさえぬらむ籬のもと
あきもなかりに咲けりなてしこ

清水谷中納言雅季卿

夕立過

俄にとかはれし夕立は
そらにはなくてよにのこれり

式部卿[illegible]仁親王

早穂風

萩の露ものたえずも[illegible]
そよしもあき秋風ぞ吹

押小路三位[illegible]卿

草花盛

植しより庭に更に萩はさき
露をなみ宮城野の原

式部卿貞建親王

夜虫

更行は枕にきこえて秋の夜は
なくねの虫とかはりやすらん

梅溪侍従俊清卿

月前

かゞみてもなくさめかねつゝや
秋かりきぬる月にむかふらん

六角三位益通

惜月

なくのみむかしも夜をかりあかく有明
あとにとゞまらは有明の山

高松中納言重季卿

待夜

まひとくはなれは社まさとはむ
まくらにはるかに夜をまちわひ

六条前中納言有藤卿

九月盡

限りとて暮ゆくもかひなく長月と
さよひなかりけれ久ねをとふ

一乗院宮尊昭法親王

河氷

たひとの声とかゝらく河氷さへ
昨夜川上あしぬはやはるらん

冷泉少将宗家朝臣

藤家源

清とれともさかりし浦のちゝは
本のゑそ庭に下せ見まて

九条前実白補実郷

池氷

袖寒くゑん月とあとしもしたしくこそ氷の
ゆらしとこきぬる池水

武者小路公野

深山雪

まれにくると誰かとはれん山深く
清とふまれぬ庭の白雪

日野中納言資枝卿

早梅

にほへ猶春をまつの宮ゐさき
垣ねのこさけしも見人の神かき

近衛左府大臣公

山館竹

すてし世のうきめしるや山窓に
竹のはと竹に志るしけりゆく

右中弁宣挙

古寺鐘

峯たかのこうらに訪れし古寺の
まゆりしりえ入相のかね

右衛督為久卿

林鳥

梢の枝にこゑめしや何きけり鳥
清きしく林かくれしつふる有

中院前大納言通躬卿

羇中晴

めつらしき野山のあさくも古人を
たとふらし旅乃まくられやすらか

暁燈　西三条中納言公福卿

清ぬしき影かけや流く古ちれ
あらつきふくてしらすゝし火

今出川大納言公詮卿

湖眺望

世れをとゝめてまもるしかし湖乃
汀まきほのしうふ波りふ

座主尊祐法親王

秋散

てらせ猶花に露あるかの露を
うつろふ浅しうら清ぬ菊し火

永六月七日　御奉有之文の日

御山にハ松の葉くもりし仰
みな御学をさしいりて
日野光栄卿
なれとせの露や是ハかはりせ
山の松みちにハかはるやまさん
御返し
色深き松の露ぞかけるとは
山のまつみちも御まもりのめ
西三条公福卿
いのりても年くらす御幸して
君の心をともにまもらむ
御返し
天が下人の御代にことにみちぬらむ
御代ともかはるまじ色しも加はらん
武者小路公野卿
御幸まつ川ためしやかはらく露の

子入らせんのかぬなくぬもみち葉

御返し

吹りすへすくぬ表あくれ一出道の葉
ちらしてやゆりんいりしと葉

藤原長義

秋山のもみちもさそふあらしふすりる
ましさいぬ林雲御なまゆらし

御返し

もみち葉もましこさん梅といゆかと
のみしへゆ紙あふかりやまり

前大納言為家卿

詠りけとおよゆしゆ君のみし
さいのものとれ山乃もみち葉

御返し

まれかけとゆきはいゆらてへさん
さし山あしぬ中さしれともみちも

見えてはしりあしめやまよ入
こぶれとみちの大松ころの葉
我穂とけりたちち◎流君のえし
追もてしそみあそりいね葉また
我穂は二ツ分りとゝ秋中さし流
さいのもか北とかゝとみちとそに
天せきや那し深りと波思ありぬの
家居ゐもち中さし虎とみち葉

文武天皇

龍田川紅葉みたれてなかるめり
わたらはにしき中やたえなん

聖武天皇

妹にこひわか乃松原見わたせは
志ほのひかたにたつなきわたる

大織冠

玉くしけみむろの山乃さ○かつら

さねすいはかなふかりとえましや

式部仁宮合

山城乃いはきのもりをもしるしとて
人つゝや君か山路にこそしれ

源當純

谷風にとくる氷乃ひまことに
うちいつる波や春乃初花

藤原菅根朝臣

秋風に声をほにあけてくる舟は
あまのとわたる雁にそありける

亭子院

立帰りてのなからすもとめ[illegible]の
さし渡[illegible]ておりふしのり[illegible]

忠義公

わすれうき秋に見えつゝゆめかともみし
つきゝ行らしらん

清慎公

池水にふさうへりかまきえたれ
なもまみ花の数ハいもとすかり

忠仁公

年ふれハよはひハ老ぬしかハあれと
花をし見れハものおもひもなし

中納言長谷雄

我かしのあ人ハ人をかりいそなし　ますまし草

ますみ乃恵みし河ゝねて

大伴池主

神無月時雨にあへるもみちハ
ふかはちりなん風乃まにゝ

八代女王

みそきするなら乃小川のかは風に
祈りそわたる下にたえしと

大納言旅人

いま風ち殿かしはのうへに白妙の
そてさへぬれてはらひかねつゝ

僧都玄賓

山田もるそふつの身こそあはれなれ
あきはてぬれハとふ人もなし

源経明朝臣

ろめくとかの秋の月影に
ともみちふきおろす山おろしの風

藤原家隆

秋なしぬ葉末そわとふひけり
そゝきりわにおけるたし家

俊恵法師

秋の月川風もきりとなにさへて
ちりぬ山路よりいまそふかき

藏内侍

ちらひても桜ちるはま家ふかり

ゐくしらんおもしれいのちをしき袖も

源順

をふねらなれさの雲れふりみをり
ゐりえなまけをよれやまちんり

平兼盛

むかしみし袖は涙のかゝるゝや
きのふりとはもあぬ日をなれ

安貴王

旅しらでまくらもゆくしほしとさめぬる
かりさきのゝせき 枕すゞしき

藤原教長

たほつるみいたこるゝかれむしめ音と
あまつの葉ふる乃音やみさみふん

奥平秋王

夜にあふことのうふとしとなきそふと
月しいをきいるらめしつふん

藤原中文

有明乃月のひかりをまつほどに
我か夜のいたくふけにける哉

橘忠幹

わすれな
わすれなよ程は雲井になりぬとも
そらゆく月のめくりあふまて

山田法師

芦引の山かけ乃いかりいのるらん
よそのはしの声きゝしかな

安法法師

西ともいつく山乃みすその雲はよ
若たちそらの夜をあかすらん

藤原惟成

忘れしまてまた夜よふけし月の
ありあけの月に人まちふなりり

菅滋友朝臣

ほとゝぎす鳴つる月に植し田を
かりねのさむしろに枕をとまあり

三条院女蔵人

大井川となき山風のさむしろに
岩うつなみと音もしられ

沙弥満誓

世乃中を何にたとへん朝ぼらけ
こぎゆく舟乃跡のしらなみ

藤原長能

いつしかとかへりのこのかへりぬる
ぬきとめぬ露をゝくらん人ふたゝびまれを

藤原範永朝臣

有明乃月も清水にやどりけり
こよひはこえじあふさかの関

堀川右大臣

桜花にほふあまりにおもふかな

あしすハ人ぞかしまさる海し

大納言公実

花のかハいりてもさんかくしの
いまさりけむ花のしらぬの

馬内侍

さよふけていりぬるいその月とえて
みやこよしれと花ひらしん

藤原元真

なみて川かもこはかりぬ知れと
さとにぬ人のかよひぬりけり

藤原

旅寝夜寝月によ心乃りくれて
ふと并よおとらふしつる

源道済

花ひら⊙ころむし世をふと来てみれ
いつさらりふらよ旅もそぬく

右近の大将て

穐しふ汀の水みしらけく
見ふつりかゝあをうるしさ

大宰大弐高遠

逢坂のせきのいはかとふみならし
山立出るきりはらのこま

源兼定

本あ霧ふちり風に八きもつくゝ
あき

かゐするこまもしられぬこまも

橘為仲朝臣

引ゆくもらぬよにさいとふる
志めふのさとの椋衣駒乃月

修理大夫顕季

かゐ引くかつちり山衣ゐ霧ふもは
いりしふく駒の引わしめらん

白川院

庭乃おもは月もらぬまてなりにけり
木末に夏のかけしけりつく

神祇伯顕仲

かとめゆぬらさきの海の沖はすた
夜ふかきいさよふ月乃さやけさ

後九条内大臣

行かしぬく枕つきうちあかに見えて
汐たひかうへに月をまつよの

二条入道大臣

いそかぬ心乃ゐこそうつりかはる庭
むかしはなにをみしはるしは

法性寺入道前関白太政大臣

契りおきし人もさかりのたのめより
身のなかぬ月のかけをこそ見れ

勝西上人

いほりさへ奈らのあれけるはことに月の

くもらしとみれハ何かなり

治部清胤

恋すかなそはましものとはかなき
いく田の森の杉のむらさめ

登蓮法師

帰りこむ程をや人にちきらまし
しのはれぬへき我身なりせは

従三位頼政

さし汐やゆめの入江に鶴なきて
あしへの月乃もとゝみゆる

左近中将公衡

かつらきやかゝりのかゝりおもかけて
よしの川瀬乃月とみえける

大炊御門右大臣

わか恋はちきのかたそきかたくしのみ
行あはてとし乃つもりぬるかな

右京大夫実家

後のよをなけく涙といひなして
しほりやせましすみ染の袖

寂然法師

秋ハ来ぬ年もなかはにすきぬとや
荻ふく風のおとろかすらん

刑部卿範兼

月清し人めはいりてかくれと

なくさめしつれ夕くれの空

大江維順女

わすられしうきめはさてもなくさめり
人のうちにおもひあけても

後徳大寺左大臣母

こひ来しもあけき袖ハ七夕も
かさねにつれていつまれとやみん

右大臣之太良

山深き草の庵の雨そゝきに
をとゝもてかゝハなみたこそあれ

鴨長明

石川やせみの小川のきよけれハ
月もなかれをたつねてそすむ

中納言定家

春日野ゝしたもえわたる草のうへに
つれなくみゆる春のあハ雪

後久我太政大臣

むさしのやゆけとも秋のはてそなき
いかなる風の末にふくらん

藤原秀能

袖のうへにたれゆへ月ハやとるそと
よそになしても人のとへかし

大蔵卿有家

春雨乃ゆきまねき代をふるらん

やまよりいでし暮露こそしけれ

大納言通具

かげきよきれよるのかはしたれ松の月
やみとてもさはすてもゆるされ

八条院高倉

うき世とはいづる日ごとにいとへども
いつかは月の入るかたを見ん

前太政大臣

みちのべのいまてかの方とふるぬ
うきみつくしてよつきの名残こゝろ

勝命法師

西山は小田のなかまにかくろひや
かもし彼とふふまりせて

皇太后宮大夫女房

夜しらぬもおもかげも契りしも
けさわすられうつゝすまね

小侍従

あさみつむ山路乃露にぬれにけり
けふくれぬ野のすゝきあ乃袖

後鳥羽院

きえやらぬうきもいのちの秋風に
あるゝかたもおもはすいかりとは

中宮亮師光

山さとの柳もさかぬ風にさそはれて
夜ふかく鳴るゝ乃声をきく哉

藤原具宗朝臣

いつあしよまてたちもいんあくよら
いつはりのなく山乃かけのゆふしれ

清輔朝臣

おもひくもそへさは月のくもり哉
もろしかゝりにしやぬまぬめらん

正三位知家

いさら山遠かりけりゆく松風よ
かれずて麻乃書とふらん

恵子内親王

皆人はさもこそあらめ世の中に
婦り乃中しらぬみかといふかせん

宜秋門院丹後

山里は世のうきよりも住わびぬ
ことのほかなる峯のあらしに

從二位行能

かぎりなき雲の絶まに見つむなよ
みえしそかくても山川乃末

源季景

あはれいかにいかなる人ひきとめ
なられそとても夜のまくらもなし

前太政大臣

春のめつらぬ夜頃体よりのうみやま

まくりよりかりのなくさあそろさき
おち風に露ちれ そのへなる
こゝろ絲しか山のやましろ
たつもの(?)されとすゝしくら
藤原隆祐朝臣

夕日さすしかの山本のさとみえて
すゝきなびく 野辺乃秋風
藤原光俊朝臣

いかめもんなるはとゝにせしふみの
おるし かはりの 命なりすと
入道二品親王道助

萩乃葉に風まつ露もありもせ
なみさのみの月さえくまし
高辨上人

雲乃下いつも秋の苔ふすみ深き
袖のつゆしらぬやかきしるし海

藤原雅経

墨染の海士乃かりそめなりし契りより
やそへんめのたよりとそとふ

藤原行家朝臣

つくさし家みちさものえられる
まよひんゆのりのえそつかれ

後二條院宮女

夢よりのこさとるにし世の中と
なにゆましふあきつゝまそらん

前中納言為藤

されのよに流もすひれんかきもれ
よまぬつさ代オ乃契りよは

天台座主澄覚

荻の葉にゆりもるあとをしのふ小
音とふかりし風乃やとりは

光明峯寺入道前摂政

神代より石河のなかにつくへから
ちかひもしるきの岸かな

常盤井入道前太政大臣

うらかせはしのれすゑにぬらて
入江とけしれ松のむしろ

中務卿宗尊親王

いつよりか松の小枝にしられよ
なみきさのあまるかひをかけん

土御門院

松の色は昔からむかへてうきのます
すゑかけし月もかゝすまし夜なる

後嵯峨院

かけ高き宮にけふにいくしるしみ
しきしまの道にいまそのこれら

伏見院

君すまんためによみしのちの松の千かけ

なすみとふけし光のこの月

花笠

河原やみなれしみの風とらへて

民のし葉ぶしも今まひくなり

常州土浦の城主土屋氏の幕下に仕ふ
石川氏室ハ和歌をよくしてこれを
もて好ける事久し去る頃ふと文月の比
よゝ胡蝶侍る折しも夢ともなしくさのふ
ませて待ることを尽くしえし花のと思ふ夢
想なんといふ事ハいかにさうなし事の
たいてよかくて侍るを中二手識よ殊に
我道ふかるひめるふしてとありしよ

あしよやむ無事とあし猶もはしさ
なと記よ侍しへ波斉の文字一字つ
しをつと三十一首の歌と出く送り
侍りしと志くり

神春

き

ゆうに今のみ栄の春とくさしけ来
ま川君神於と忌とのともし

山蔵

浦井

の

のと家しれ春氣なしれきはふふ
かすみをえぬめり写の山桜

夜梅

あや

ふ

ふる萩夜の夢かうつり春風に
おれとへす白ふ嘉り君

春曙

はと

ま

まこ咲ぬちと云し川よ霞こめ
山桜白ふさ於れ八可の

て

待花　芦田

てふとおりてまり川かとふし咲やらぬ

庭ちさくなれきれの日数を

松藤　海井

ま

松をつれ枝ふ川とをかゑとめて

紫まりふたなれふりたれみ

暮春　芦田

た

たつひたる花ちれゆきも前とく

くれゆく春の名残とそおもふ

郭公　さと

か

かのつふと啼すやいよしたつ城

袖ぬ夜うさしぬ山わけしえ

蓑月　こと

こ

友となるとても袖となく言ぬ秋

木乃るすくしまてすめの月影

夕立

と

とんのゝにきりふとられハ雲晴て
さす米涼しさ夕しら者
早秋　おや

を

並萩葉にさしく見えて
朝戸ゝ涼し秋乃袖かな
萩風　とと

く

くれおく山夕詠と秋とハいふらなやと
抱しちりれたれ上り揚

み

袖雁　花田
みえとけり思雲路をおりふし鳴つれて
いまさら旅の袖ぬらしけり

秋夕　渦井

志

志ほて行そのとそたもふなかもの
しらぬと淋しさ秋乃夕ぐれ

野月　さと

も

もろともに雲すく小夜更く

る

月さへまよふ武蔵野ゆくしたら

菊露　とと

冬に見ゆるしもしも菊のさかりに
露とたまへるくろ色をこそ見れ　江雲

の

新樹さへ夕日にかゝやきてりそひて
庭のこの葉も色こそこきぬる

時雨　美田

け

もみぢちるや雲さしこめる外山里は
時雨ともしらぬ風ぞ吹なる

みぞれ

さ

さりともやつもるも雪と海風に
吹まよふ雨もみぞれなりけり

初雪　とと

め

めづらしな山の端ゆかしの峯も今
うつもれりもしりに降る白雪

つ

祈恋　おや

つれなしも一節にかはるそよ
神の恵乃逢夜ありやなし

契恋　さと

ら

らうたしの中のよしみも見する夜の
ふかきことの葉契りすまし

逢恋　若田

し

しのそうまつしさも今宵見すられ
うしろきともと契りし人の絶

別恋　さと

く

くろしろ乃まじはれし枕いうかさと
しかりもなつかすおらく別離

名恋　玄沼

さ

さみすりまこつまるきくんと見すねを
たゝとしてうらしもはとうきさ

怨恋　とと

け

りやうもかつこのこゝろはさくら
つまかくしつら葛のうら風
暁鶉　わが鴻ふ母
蔵よ

る

ねいとまこゝやとて雪のふるかな
ふるさとのしもさへゆく
暁乃空
滝松　滝井

ひ

一ゝりにしてからみとりさしけるや
見よとはふしかまれ滝の松か枝

と

あさしもをおけるのけふもちよふかき
りすへ契りて寒をしらぬ竹
寒竹　滝井

ゑ

枝ことにきさ松とふるきかけやれや
神路乃山の月のひかりに
神祇　吉田兼文
雅喜

た

民草のなひくもしるしよもすゝし世の気色
祝言

いまも招くゝるに風乃さそひくる

三月廿六日石原左内殿の
庭の牡丹花盛に有花見に
まことまいりて

同信常乃母

常盤なる千代よなしひさし袖葉草
の御代と愛めつきて志るけき

里女

咲そめて色香もいとしふしく草

松萬代の春哉といへる

こゝろせもまとゐしてこそむつましき
花もあるじもともにさかへて

蜂須賀松平阿波守母
菊女

咲花の色ハちとせのみどり草
この代万代の春もかはらん

右の歌萬代ニ松平

あいさつの哥

咲花のみどりハおのゝかさねるや
ことのはふそへる花そえるゆめ

芳力庭おもし杜丹花盛ニ付
いろもいつて

松平
正字

風をそもいとしおのひハみどり草
花咲ちり折よひれて

同

幾千代も松にかはらぬ小笹生の
いろしそめにならへ千代をちきらん
星女

幾かへり春よ契りてかはらぬ草
松もみとせのあまよ白かん
彩雲亭女

君かそよ色ゆるも年よふりしみ草

万代ふかき宿の呉竹

同

あさしぬ色まそふみとり草
人の心乃松としりけて
菊女

年へてもかはらぬ色のみとり草
あをやきめてむ万代の春

萬力女あいさつの哥

我すゝぬよりかゝる庭の梅かゝを
たとえなしゝぬ人の心の香

同

とりくる人の心の香のかよふを
色も一しほいろそましぬる

庭藤花

あふもまつこのまとまつて色ハへて
かゝらむゆかりの色も咲

春月朧

さくら花も霞にかすむ白ふ朧夜乃
かすみ衣や月にうかれん

見色也忍

若やして我つゝむ袖の上の

たれゆゑはんと思ひさためゝ

待時鳥

まつ事に我ねこゝろやふかしきに
きしはゆゑんのそつゝ神恵と

新樹風

いろひはぬ梢をましくも見みとり
なつやむかしし雨の降かさん

河野

大井川なくゝ乃淵ハ人こそいつまて
かゝりていつまて瀬ゝの船哉

田家鹿

淋しさは稲葉門田乃ひたは庵
そつてもいりて鹿の鳴声

浦月

浮雲もよそにすゝ尾の浦風に
月そなかるゝ花浪乃をち山

時雨

我宿の軒端に近き時雨しん
ふるとも知らし心とめし

千鳥

難波かた夕しほかせに河しほ満くれは
沖洲にちとり鳴也

思顕恋

今宵とやいひし人まの一言ハ
さしくらす袖もまちらえむ

寄月恋

ありし人なつさ秋月ハまたこそふ字
うき雲霧やすとさへるらん

寄雨恋

宵乃間よふりもさかりし雨如と
逢夜泣きつる袖ハうかりけり

夕旅

とはこえし中まもかれ岸なるし
都にも歳をむかへまかすめる

寄道祝

まともしれ七の道ハいつれても
かしこき御代乃ひとつ恵ま

淡海八景

黒髪秋月

思ふ夜ハ女といゝまぬしらうき夜
そりまうかしの袖ふこきまん

白粉暮雪

うらみとおへ中川しれのうへ抜ひ
ゆめふしやさ乃富士をひらさ

打掛晴嵐

吹拂ふ我あらしはこぼれ打かけ哉
きしたらぬ雷や虎ふすもろん

神濃松月

松乃夜の月みて二見えぬ神らしみ
まつりよ娘わもし人やうしらん

首笄晩童

ゆまくらそさうらふ扣りらんさし哉
ミしあやしふ入お乃しゆ

揺楷斎广

うみさく招く花うすぬともさし桜の
まちゆ浪よ招つれうゆうらさとらせぬ

抱常海帆

うつれさと招られしとけの一まわい
そうしく影わ見らせよ不ゝらん哉

可書の夕思

吹うくくは花見すその名みらしも

入日よ光ふくもの中ふく